

十 綱 橋

とつなばし

東北地方有数の飯坂温泉街をふたつにわけて流れる^{すりかみ}摺上川に、十綱橋はかかる。「みちのくの とつな橋に くる綱の 絶やすも人に いいわたるかな」(千載集恋歌)と、古く平安時代のむかしより歌に詠まれたように、ここは東北地方の交通の要にあたった。「十綱」の名は、摺上川の川岸より対岸の湯野街館本館の南にある柳の木に十条の藤の綱を張り、それに横木をむすび橋としたことに由来する。

文治5年(1189)平泉攻めをおこなわんとする頼朝勢を迎え討つため、大鳥城主佐藤基治は、この橋を切り落とし、石那坂の戦いにおもむいたといわれる。その後、橋は、兩岸に綱を張り、小舟をたぐる十綱の渡しと変わり、松尾芭蕉もこの渡しを利用した。

明治のはじめ、当地に伊達一という目の不自由な人がいた。この名前、彼が京都で按摩の修業をして^{けんぎょう}検校の次座の^{こうどう}「勾当」の位を授けられ、時の御学問所の総検校から、「伊達の一」という名前をもらったことに由来する。

明治6年(1873)、彼の陳情と溜金50両、それに菓子行商の熊坂惣兵衛らの協力により、木製のハウトラスが架けられ、摺上橋と名づけられた。文献によるとドイツ式木製吊橋となっているが、当時の錦絵をみると一部部材に鉄の棒を使った曲弦の木製トラスである。この形式は1840年、米国人のハウが特許をとったもので、19世紀後半にドイツでもかなり架けられた。発案から33年後に、このような形式の橋が東北の地にかけられたことになる。ただハウの発案したトラスは上下の弦材は直線であるから、さらに進んだ形式といえる曲弦の採用は日本人の発案であるかも知れない。残念なことには、当時最新の形式の橋もわずか一年ももたずに、明治7年9月に一大音響とともに崩落した。

そこで時の安場県令は官費8700円を出資し、明治8年にできた皇居の山里の吊橋を模して、十条の鉄線をケーブルとする吊橋を架設し、十綱橋と命名した。しかし橋はなお問題が多く、修繕費もかさむばかりであった。これを憂えた伊達一は^{みこ}巫女のおつげを信じ、橋の安泰と隆盛を念じ人柱にならんと川に身を投じた。

大正4年(1915)木曾川の木曾橋とともに、当時の新しい技術で現在の十綱橋のアーチがかけられた。以後、昭和19年の飯坂大火にも耐え、今日に至る。アーチ・リブは、二本の弦材が形鋼で綾状にむすばれ、模様としての効果をかもしだしている。よくみるとそれは、一本おきに垂直に立てられ、橋全体に統一感を与える優れた設計になっている。

あたらしい十綱橋の袂には、「飯坂のはりがね橋に雫する 吾妻の山の水色のかぜ」と詠った与謝野晶子の詩碑と隣あって、伊達一の碑が立っている。〔KS〕

竣工年月：大正4年(1915)

所在地：福島県福島市飯坂

河川名：摺上川

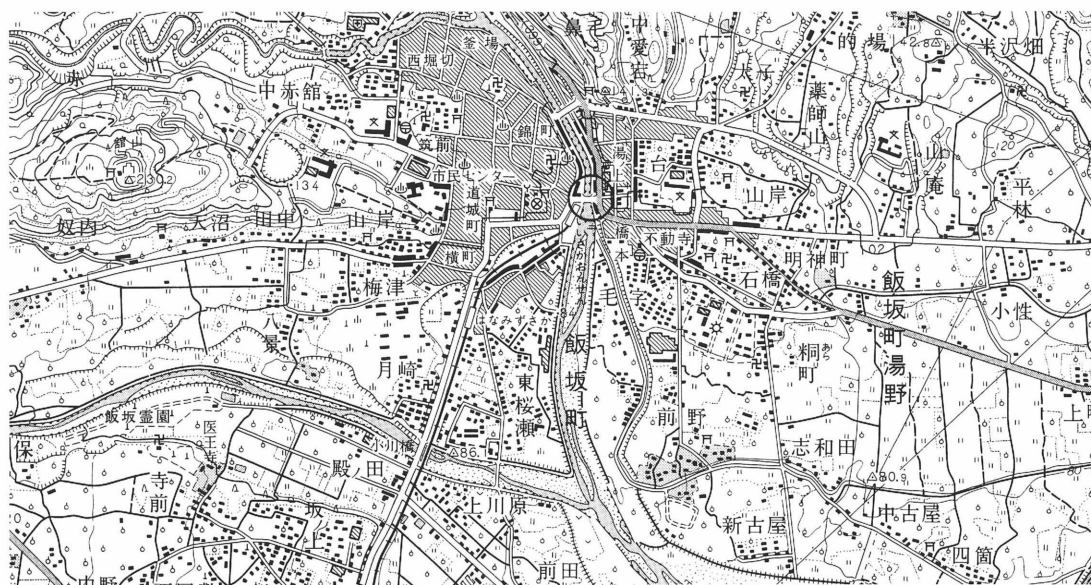
橋長・幅員：51.7m(道路中心)×6.5m、(上流側橋長49.4m、下流側橋長54.0m)

径間数・支間長：1×40.24m(両側に側径間あり)

形 式：上路ブレースドリブアーチ



〈1994年4月30日，撮影・倉西 茂〉



(1:25,000 福島北部)